我が家の家庭教育

やりたいことを……。

入　小野満　恭子

「ただいま。」「やろうぜ。」「早く、早く。」元気な声で小学校2年の息子が帰って来ます。と、同時に、2、3人、友だちが上がりこんで来ます。言わずと知れたファミコンです。

我が家は夫と私、小2の長男と3歳半の長女の4人です。普通に言うと核家族というのでしょうが、4人だけでいることはあまりありません。夫も私も陶芸作家という職業柄いろいろな人が、いろいろな時間に出入りしているからです。

夫の実家は群馬、私は広島なので2人の子供はおじいちゃんおばあちゃんに会うのが年に1回か2回。でも彼らにはたくさんのおじいちゃんおばあちゃんがいます。今住んでいる家を貸して下さっている大家さんは、月に数回、船橋から泊まりに来てくれてほんとうの祖父母のようにめんどうを見てくれています。その他、来れば必ず泊まっていく私たちの友人は、お兄さんもお姉さんもおじさんもおばさんも子供たちにとっては親戚なのです。だから皆が子供たちの世話をやき、私たちも友人の子供たちのめんどうを見ます。そういう意味では大家族なのかもしれないと思うことがあります。

仕事が中心の生活なので、展覧会、スケッチ旅行と、親の都合でどこへでも連れて行きます。これが親の仕事なんだということは認識しているようで、そう文句も言わずについて来ます。遊び道具も何もないところで、ふと気付くといろいろなもので工夫して遊んでいるのを見ると、内心ほっとしたりするのです。

自分たちが大きくなった事を考えると、忙しい中でもやりたい事は思いきりやらせてあげたいと思います。だから今、ファミコンだってやりたいならうんと上手になれと言っているのです。たとえそれで目が悪くなりメガネをかける事になっても、やりたいだけやった満足感や自信は子供の心に大きく残るのではないでしょうか。大人になって、何が生きていく指標かと言うと『自信』だと思うのです。今自分がいったい何をやりたいのかわからない青年が増えているのを見るにつけて、制限された結果ではと、その思いを強くしています。

常に新しいものに向かって進んでいくこと、いつも世界に目を広げていること、これが私たちの仕事のテーマで、それを実行しようと苦しんでいる私たちを見せることが、言ってみれば、ウチの子育てなのかもしれません。

▲お正月マレーシアで

児童・生徒の作品コーナー

日吉小学校児童の紹介

『いちごがり』

1年
ほりこしゆうきくん

※いちごがりに行って、たくさんおいしいいちごを食べているところをがんばって描きました。

『にじのはし』

2年
森　聡美ちゃん

※山の色をぬるところや花をかくところがたいへんでした。